

こうして後出しじゃんけんで議論の陥穽を探してはいるが、これだけの書を世に問うた著者のエスノグラファーとしての手腕は掛け値なしに賞賛に値する。一同業者として、ここに投下したであろう時間と労力がいかに大きなものであったかは容易に想像がつく。人類学者が著すエスノグラフィやモノグラフは、実に高い頁単価と単独性に裏打ちされたものだと思ってしまう。こんなことを考えていると、ついつい批判の矛先も鈍る。

高倉浩樹編、『寒冷アジアの文化生態史』
(シリーズ 東北アジアの社会と環境)
古今書院, 2018 年, 130 p.

田中利和*

アフリカを起源とする人類は寒冷アジアに進出し、どのように生きぬいてきたのであろうか。この寒冷地域には、ミクロな観点に立つと、他地域における従来の生業の研究成果だけでは十分に理解できない社会が存在する。たとえば、牧畜と漁撈が同時におこなわれることや、狩猟採集民が定住化し階層社会をつくる点である。本書は、寒冷という生態環境を背景とした北アジアの狩猟採集民や牧畜民の歴史を、環境と文化の相互作用として読み解き、個々の社会組織にみられる環境適応の柔軟性と脆弱性を明らかにするものである。

本書は5人の執筆者による5章の構成であり、考古学および民族誌的観察に依拠しな

がら、局所的な自然環境のなかで展開した個別の生業の複合に着目し、これを適応ないし進化という観点から分析したものである。各章は個別にも読めるし、全体の流れに沿うのもよい。なお、これらの論考は2015年12月5日6日に仙台でおこなわれた東北大学東北アジア研究センター20周年記念シンポジウム「東北アジア地域研究の新たなパラダイム」のセッション「東北アジアの人類誌と環境適応」がもとになっている。内容をみていこう。

第1章「北東ユーラシアにおける人類の最寒冷期への適応」は先史考古学を専門とする鹿又喜隆によって執筆されている。寒冷北アジアの環境と技術の関係を旧石器時代の人類史の総説的な内容を含めながら、シベリアが起源と推測される石器の代表例である「細石刃(さいせきじん)」に焦点をあてて議論をしている。細石刃は、骨角製の槍先や銛先の側縁に彫られた溝に並べて嵌め込まれた道具である。最寒冷期に細石刃を有した集団が活発な活動を開始したことで、中国北部や韓半島、北海道まで、細石刃石器群は急速に拡散していった。これはツンドラステップとそこで生息する動物群の南下によるものと考えられ、この広域拡散は環境変動にともなう人類の長距離移動の証拠としてみる事ができる。晩氷期に入り急激な温暖化現象にみまわれると、日本列島はじめ北東ユーラシア沿岸部では細石刃石器群が広域にわたり消滅するが、対照的に、カムチャッカやアラスカの遺跡の調査からはそれらが存続したことがわかっていく。細石刃技術は人類の寒冷地適応

* 東北大学東北アジア研究センター

の所産であり、その分布はその適応可能技術が温暖化によって北に移動した結果でもあるといえる。環境と人類の技術文化の相互関係を広域的に、そして長期の時間軸をとって実証的に検討していく研究の重要性がうかがえる。

第2章「アイヌ・エコシステムの舞台裏—民族誌に描かれたアイヌ社会像の再考」は人類学・歴史生態学を専門とする大西秀之によって執筆されている。東北アジアを代表する狩猟・漁撈・採集を主要な生業基盤としていたアイヌの民族誌と近年の歴史・考古学などの既存研究をもちいて、アイヌ社会の歴史的変遷とその舞台裏について論理的な考察をおこなっている。20世紀初頭までのアイヌ社会については、狩猟採集を基盤にしながらも、近隣の集団や国家と交易を積極的におこなうなかで比較的複雑な社会組織を形成し階層化を遂げるなど、他地域の狩猟採集社会とは異なる特徴が報告されてきた。著者はそのような生存戦略や社会形態は必ずしも自律的なものではなく、日中露などの周辺の国家による植民地主義の影響をうけて形成されてきたものだという。北海道アイヌと幕藩体制の関係についての分析を通じて導かれるアイヌ社会の特質とは、交易によって階層性が発生し、ややもすれば「首長制」にまで発展するような可能性を有していた反面で、最終的には外部社会に従属する側面をももっていたように、発展と従属の二極の振り子を持ち合わせたものであった。ここから著者は、アイヌ社会を歴史的な政治環境と自然環境へ適応する集団ととらえ、汎東アジア世界に広がる

資本主義の分業に組み込まれた「熱い社会」の一端であったことを論じている。歴史資料と民族誌の両輪で分析をすすめる点は、多くの示唆がある。

第3章「永久凍土と人類文化の相互作用—東シベリア森林地帯における動的自然・ミクロ環境・進化をめぐる考察」は社会人類学、北極研究を専門とする高倉浩樹によって執筆されている。環境はつねに変化しつづける「動的自然」という見方をもって、自然環境の変化に応答する社会・文化という視座で分析することの重要性を指摘する。そのうえで、極寒のシベリア、サハの人びとの生業と歴史、自然環境の関係性を論理的に説明していく。10–13世紀頃に東シベリアに北上した牧畜民サハは、永久凍土の地表上の森林内に形成されるアラスとよばれる湖沼を、牧畜適応において根源的な条件である牧草地・採草地と認識し、生業適応をおこなった。あわせて沼湖では漁撈をおこない、アラスの外に広がる森林では狩猟するという生業適応と複合をあらたに形成し、人口の規模でも近隣集団を圧倒した。環境は生業選択の選択肢を限定するが、そのなかで何を選ぶかは歴史や文化に依拠するという「歴史可能主義」を援用することによって理解がすすむことを示している。環境史と人類史の交差の方法と論理の可能性を切りひらく論考であるといえる。

第4章「西シベリア森林地帯における淡水漁撈とトナカイ牧畜の環境利用」は、社会人類学、シベリア地域研究を専門とする大石侑香によって執筆されている。広大な森林と湿原を舞台に同時代を生きるハンティのトナ

カイ牧畜と漁撈の生業複合について、2011年から2012年にかけて計7ヵ月間ヌムト湖周辺でおこなったフィールドワークのデータをもとに民族誌的記述をおこなっている。生業暦をみても、冬季、氷点下2.3–20.9℃に屠畜をおこなうことは、肉をそのまま冷凍保存することにも通じる。それは漁撈が困難で魚が不足する湖川の凍結期に食料を補う寒冷地特有の資源管理の方法とみることができる。最も興味深い点は、「トナカイが魚を食べる」という点である。人間が捕獲した魚をトナカイに与え、群れの管理に利用しているという。ひとつ目の目的は、人が魚をまいて、牧柵のなかなど目的の場所へトナカイ群を誘導するためである。2つ目の目的は、人が魚を優先的に特定のトナカイに手で与え、人に順化した先導するトナカイの個体をつくりだし、群管理に役立てるためである。魚とトナカイが結びついた特有の生業複合が同地域には存在しており、鍵となる魚資源を提供する自然環境利用の漁撈と牧畜の文化が調和していることが論じられている。

第5章「生態環境が育む北アジア牧畜の特徴—西アジア牧畜との対比から」は文化人類学、牧畜研究、乳文化研究を専門とする平田昌弘によって執筆されている。西アジアで紀元前8500年頃に家畜化し、現在同地域および北アジアでも飼養されているヒツジとヤギに着目しながら、地域間比較を通じて、冷涼な生態環境下の牧畜がいかに形成されていたのかを考察したものである。搾乳と乳利用は少なくとも考古学的知見から、紀元前7千年紀にはおこなわれていたことが明らか

になっており、西アジアで一元的に起源周辺地域に伝わっていったと乳文化の研究から示唆されている。一方で北アジアの牧畜の特徴は冬に草地の飼料資源が乏しくなり、搾乳量が少なくなることに加えて、まとまった数の家畜を屠殺し、氷点下20℃を下まわる環境のもと冷凍保存もできるため、肉の摂取量が冬では半分弱にもなることがあげられる。両地域の家畜管理技術の紹介をふまえたうえで、西アジアに特徴的な発酵乳系列群の南方乳文化圏が、北アジアに特徴的な、酸乳に加工する必然性から開放されたクリーム分離系列群の北方乳文化圏へと変遷した主要因は「冷涼性」であることを、自然科学的な説明も加えながら論じている。生態環境と牧畜文化の相互作用によって、それぞれの地域における乳文化の型を文理横断的に論じる貴重な視座を提供している。

各章を簡潔に紹介してきたが、本書は一貫して、寒冷アジアに暮らしてきた人びとと環境との関係をテーマに、各専門の方法論を駆使して理論的考察をおこなっており、これによりあらたな知見を提示している点が最大の魅力といえるだろう。本書は寒冷アジアに暮らす人びとに関心がある考古学、歴史学、人類学を研究する人が活用できるだけでなく、アジア・アフリカをはじめ他地域の人びとに関心をもって研究をする人にも勧めることができる。それは、環境と文化の相互作用という柔軟かつダイナミックな分析視点を備える本書が、特定の地域と人びとを理解するうえでの地域研究の調査方法について重要な問題提起をおこない、かつその方法に厚みをもた

せるものと思われるからである。本書には、個人による研究の可能性を広げることに加えて、他分野の研究者と、地域・人間理解を目指した共同研究を発展させるためのヒントが詰まっている。地域研究の枠組みと可能性を広げる本としておおいに価値があるといえる。

最後に、編者の寒冷アジア研究をめぐる各執筆者の魅力をバランスよく調和した本にしあげた「ブレンド力」に敬意を示したうえで、評者が味わって見たかった点をあげてみたい。各章間における執筆者や研究分野の相互作用が正あるいは負に働く可能性などが議論されている紙面があれば、さらに楽しめた

のではないかと考える。具体的には、本書のもととなった、シンポジウムの質疑応答や総合討論の記録、まとめなどである。もちろん、本書の構成と各章にその議論が反映されていることは想像できる。しかし、今後の地域研究のあり方や展開、課題を検討するうえでも、そのような討論の場の情報は貴重な材料となりうるし、このような試みの場における空気感に文章を通じてふれてみたかった。今後も寒冷地をめぐる北方アジアの研究から、学問分野と地域の越境・連携も含めた、知的可能性を開拓する研究の成果が発表されることを楽しみにしている。